

浅間山の噴火と歴史

記録に残る浅間山の噴火とその後の歴史の因果関係は
685年の大噴火の時は、大化の改新後40年ということは東山道の原型がすばや
い形で出来上がってきたところ。この頃が寺井の地に寺が壮健される頃で、被
災にあつてことで人心が動乱期にあったのではないか。それを仏教寺院が人心
を掌握するのによい好機であったかとも思われる。

次の大噴火は1108年これにより関東には多量の灰が降ったようだ。これにより
住民が飢饉で亡くなり、大移動が起こる。

1030年にはここ新田郡衙の歴史は終っていたと考える。70年に近い空白がある。
この後、新たな人たちの流入などで統治、および開拓開墾が起こり、荘園化が
起こる。新田氏の始まりは開墾と荘園づくりの歴史、関東平野の開墾の歴史と
いっても良いと思われる。

1091 産まれの源義国が

義国 15 歳の時 1106 年、父義家に息子捕縛命令が出る。義家は関東に義国を飛
ばす。

義国 23 才の時 1114 年義重誕生。

義国 26 歳の時 1127 年義康誕生。

義国 36 歳の時 1142 足利の庄成立。

義国 61 歳の時 1152 年には新田の庄が成立。

義国 64 歳の時 1155 年に義重の新田の庄で死ぬ。この年号も決して定かではな
い。それだけ源氏といってもまだ身分はなく、歴史に現時点では現れていない
のであろう。ここから武士の世になるが、まだ源氏の世ではなく、「平家でなけ
れば人でない」が、都を中心に始まった頃である。